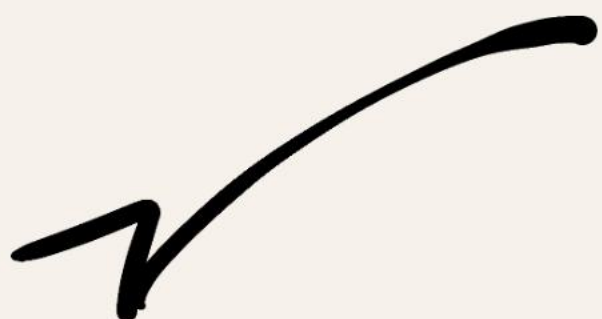


KEHARE CAREER NOTE

育てるのではない、
育つ場をつくる。



学校と家庭のための、キャリア教育ノート

KeHare（ケハレ） 代表 渡部由貴

はじめに — このノートについて

このノートは、学校の先生、保護者の方、そして若い世代と関わる企業の方に向けて書きました。

キャリア教育というと、「将来の職業を早く決めさせる教育」と受け取られることがあります。私たちの考えは少し違います。**職業名を決めることより、自分の進む道を自分の言葉で語れるようになること。**そのための環境を整えることが、キャリア教育の為事（しごと）だと考えています。

ここに書いたことは、どこかの理論書の要約ではありません。高校の教室や講演の現場で、生徒たちと向き合う中で確かめてきたことを、そのまま言葉にしたものです。だから、内容はささやかです。そのかわり、明日の教室や今晚の食卓で、すぐに試せるものだけを選びました。

前半は考え方を三つ、後半は実践の型を紹介します。10分ほどで読み終わる分量です。

※「為事」という表記は、「誰かの為に為す事」という意味を込めた、このノートでの書き方です。

育てるのではなく、育つ場をつくる

「育てる」は、大人が主語の言葉。

「育つ」は、子どもが主語の言葉。

この主語の取り違えが、キャリア教育のつまずきの多くを生んでいると感じます。大人が「育てよう」と力を込めるほど、子どもは「決めてもらう側」に回ってしまう。よかれと思った助言が、本人が自分で決める練習の機会を、少しずつ奪っていきます。

では大人には何ができるのか。**場を整えることです。**考えるための時間、考えたくなる問い、そして関わる人。畑にたとえるなら、作物を無理に引き伸ばすのではなく、土を耕し、水はけを整えること。よく耕された場所で、子どもは自分の力で育っていきます。

講演の場でも、答えを教えるより、生徒が自分の言葉を見つけるまでの沈黙を待つほうが、あとに残るものが大きい。何度もそう実感してきました。沈黙は停滞ではなく、言葉が生まれる直前の時間です。

「できる人」より、「できた人」

納得は、経験からしか生まれない。

面接練習や進路面談で、生徒はよく「立派な長所」を用意してきます。コミュニケーション能力、リーダーシップ、計画性。けれど、借りてきた言葉は、本人の顔を素通りしていきます。

強いのは、小さくても「実際にやり遂げた」出来事です。文化祭の裏方で最後まで残った日のこと。部活で後輩に教え方を変えてみたこと。「できる」の証明を並べるより、「できた」の記憶をひとつ持っていること。自分の言葉は、そこからしか生まれません。

そしてもうひとつ。納得は、ひとりでは完成しません。自己分析シートを何枚書いても、それはまだ「仮の自分」です。仮の自分を人との関わりの中で試し、相手の反応の中で確かめて、はじめて「そうか、自分はこういう人間か」という納得に変わります。

キャリア教育の設計で大切なのは、この「試す相手」と「試す機会」を、環境として用意しておくことです。

集めるのではなく、差し出す

必要か、不要か。

本人が判断できる材料を、差し出す。

進路情報は、集めれば集めるほど選べなくなります。パンフレットの山を前にした生徒に必要なのは、もっと多くの情報ではなく、「**自分に必要か、不要かを判断できるかたち**」に翻訳された材料です。

これは学校の広報でも、企業の採用でも同じだと考えています。来てほしい人を集める工夫より先に、合わない人が「合わない」と早く気づける正直な情報を出すこと。それは遠回りに見えて、入ったあとのミスマッチを減らし、選んだ本人の納得を守ります。

家庭でも使える考え方です。親の願いは、隠す必要はありません。ただし命令としてではなく、判断材料のひとつとして差し出す。「お父さんはこう思うけど、決めるのはあなた」——この一言があるかないかで、同じ内容がまったく違って届きます。

大人が差し出す姿を見せること自体が、子どもへの無言の授業になります。誰かの役に立つ人は、集める人ではなく、差し出せる人だからです。

実践の型 ― 学校で

型 1 生徒を「進学組・就職組」で分けて呼びかけない

属性で分けた瞬間、生徒は「振り分けられる側」になります。呼びかけは進路の種類ではなく、「自分の道を考える人」として一本で通す。分けるのは教材ではなく、個別の対話の中身だけで足ります。

型 2 大きな問いを、小さな問いに割る

「将来何になりたい？」——この問いに答えられる生徒はほとんどいません。

「最近、時間を忘れて没頭したのはどんなとき？」「頼まれてもいないのに、ついやってしまうことは？」——事実を聞く小さな問いなら、誰でも話し始められます。職業名は、その先で勝手に見つかります。

型 3 言い換えて、返す

生徒の言葉を、少しだけ違う言葉で言い換えて返してみてください。「それって、こういうこと？」。合っていれば生徒は深くうなずき、違っていれば「いや、どちらかというところ……」と自分から言葉を探し始めます。**自分の言葉は、他人の言い換えとの差分から見つかります。**

型 4 沈黙を、急かさない

問いのあとの沈黙は、考えている時間です。10秒待てるかどうかで、出てくる言葉の深さが変わります。

実践の型 ― 家庭で

型 1 「なんで？」を「どのへんが？」に変える

「なんでその学校がいいの？」は、理由を問うつもりでも、詰問に聞こえます。

「どのへんがいいなと思ったの？」なら、部分の話でよくなるので、答えるハードルが下がります。理由がまだ言葉になっていなくても、話し始められる問いです。

型 2 言葉にならない気持ちを、そのまま置いておく

「うまく言えない」と言われたら、無理に言わせないでください。「まだ言葉になってないんだね。なったら聞かせて」で止める。言語化を急かさないことは、放置ではなく、信頼の表明です。言葉は、急かされない場所でしか育ちません。

型 3 向かい合わずに、横に並ぶ

進路の話は、食卓で正面から切り出すより、車の中や台所仕事の途中など、同じ方向を向いている時間のほうがよく進みます。視線がぶつからない分、言葉が出やすくなります。

型 4 結論を出させようとしない

家庭の役割は、決めさせることではなく、判断材料と一緒に眺めることです。決めるのは本人。決めた経験だけが、次も自分で決める力になります。

おわりに — KeHareについて

育てるのではなく、育つ場をつくる。

「できる人」より、「できた人」。

集めるのではなく、差し出す。

このノートに書いたのは、特別な道具のいない、姿勢の話ばかりです。教室でも家庭でも、今日から試していただけます。そして、うまくいった型があれば、ぜひ周りの方に差し出してください。

KeHare（ケハレ）は、北海道を拠点に、子どもたちが育つ教育環境を耕す会社です。

学校向けキャリア教育支援

高校での授業・講演、探究学習の設計支援（提供中）

KeHare塾［キャリア教育塾］

中高生と保護者のためのキャリア教育塾（2026年開塾準備中）

KeHare高等学院

北海道滝川市・通信制高校サポート校（2027年4月開校準備中）

KeHare出版

教育の考え方を漫画・書籍のかたちで届ける出版レーベル（準備中）

つながりルール

QRコード名刺起点の、企業と若い世代の導線サービス（提供中）

CONTACT

講演・授業のご依頼、ご相談はメールでお受けしています。本ノートは、学校・家庭でご自由にお使いください。

w.y.kehare@gmail.com